

恥ずかしくないような
仕事をしろ！

1枚の黄楊櫛が完成するまでに64
もの工程を経るといだが、「1か所も
手は抜けません。そんなことしたら、
すぐに品物に出ちゃいますから」。



美 伝統の手技

第二十三回

この道55年、
黄楊櫛職人竹内勉さんは、
15代目の敬一さんと
伝統の技を磨き続ける。



黄楊は木の中でも一等に硬い。だからその手間は尋常
ではない。本物は使ってみてその価値がわかる。髪に
なじみ手になじむ。わが国にたった1軒だけ残る本物
の黄楊櫛。職人は、あくまでも手を緩めない。

文/山川敦司 撮影/荻谷真紀

十三や商店
東京都台東区上野2-12-21
TEL:03-3831-3238

職人の技術つてのは、
親方から
身体で引き継がれてきたものだ。

「皆さんも、本つげ」と焼印が入った櫛を見かけたことがあるでしょ。でも実はあれ、99・9%がタイあたりからの輸入材を削った物。だから黄楊なのにすぐに歯が折れた、なんてことが平気で起こっちゃう。弱いんじゃないんですよ。偽物だからね、仕方ないんですよ」

ここは東京、上野池之端。のっけから、ため息交じりに言うのが黄楊櫛製造販売店『十三や』14代目ご主人の竹内勉さんだ。

同店の創業は天文元(1736)年、徳川八代将軍吉宗の時代というから、今年で276年の歴史を刻む黄楊櫛作りの老舗だ。

それにしても竹内さん、どうしてそんな細かい物が手を振って出回るようになったんですか？

「ま、要はここ(心)の問題ですね。実は国産の黄楊は明治の末頃、すでに2割程度しかなかったんです。で、30年くらい前に外材をシヤム黄楊といって売出したものの、語呂が悪いので『本つげ』という名前を付けた。すると、みんな右へ倣えになっちゃった。ほんと、嘆かわしい限りですよ」

そういえば以前、母親がどこぞのみやげ物やで「本つげ」と刻印された櫛を買い、すぐに歯が欠けてしまったことがあったが、本つげだからもったいないし……と捨てられず、鏡台の棚にしまいこんでいたことを思い出した。

「ま、推して知るべし、といったところじゃないですか」

竹内さんの一言に、母親の哀しげな横顔が浮かんだことは言うまでもない。それはさておき――。

黄楊櫛には形状や目の細さによってさまざまな種類があり、髪を解きほぐすのに使う「解き櫛」のほか、細かい目で頭皮の垢や汚れを取る「梳き櫛」、また飾り櫛とも呼ばれ装身具として使われた「押櫛」など、日本髪を結っていた時代はそれぞれが用途によって使い分けられていた。

だが、時代と共に日本髪が姿を消した昨今では、黄楊櫛を伝統工芸品と捉え、プレゼント用にと買い求めるケースも多いのだとか。

「本来、櫛というのは自分に合ったものを使わないと独特のよさが出てこないもの。ですからプレゼントの場合、女性のお客さんで



左上／歯が仕上がったあと、持ち手の側を成型するために使う糸鋸。右上／トクサ(木賊)の茎の皮や、鮫皮を貼った「はずり棒」と呼ばれるやすり各種。一番左は艶を出すために使う鹿の骨。右下／トクサ(木賊)の茎の皮。これをヤスリに貼り、櫛の歯を丹念に磨き上げていく。



左／関東大震災で家屋は全焼。なんとか持ち出せたのは過去帳とこの看板だけだった。右／九と四(く)で「十三や」。目の前は不忍池だ。



朝日新聞紙上に「下町そぞろ歩き」というタイトルで掲載された、石田良介さんによる剪画(切り絵)。

竹内 勉 Takeuchi Tutomu

1942(昭和17)年、東京生まれ。1736(元文1)年、八代将軍徳川吉宗の時代に創業した「十三や」14代目。中学校を卒業後、15歳でこの道に入り、黄楊櫛作りの名人といわれた職人、醍醐善次郎氏に師事。ご本人曰く「10年で材料の見方や削り方、道具の作り方など一通りの基礎知識を身につけた」と、2年間の御礼奉公を経て17、8年目にしてようやく「ある程度の品物ができるようにになった」という。「十三や」では、鹿児島産の薩摩黄楊ほか、国産の材料だけを使い手仕事で黄楊櫛を作る。



「もちろん、特注にも応じますよ。勉強させてもらって、できないことができるようになる。職人は生涯勉強だからね」と竹内さん。



竹内敬一 Takeuchi Keiichi

1967(昭和42)生、東京生まれ。子供の頃から父の後姿を見て育つ。高校時代、家に訪ねてくる父の知人らから、ことあるごとに、「お前、店継ぐんだろ? いいぞ、自営業だから好きなきに休めるぞ!」と言われ、「じゃ、とりあえずやってみるか」という気持ちで職人の世界へ。7年ほどして、自分が作った黄楊櫛を購入した女性客から「この間買った櫛、とても良かったわ」と声をかけられ、感動。以来どんどん黄楊櫛の奥深さに魅了されていき、「職人であると同時に、屋号を継承していくことを踏まえて、基本を変えずに、時代に合わせたものを作っていきたい」と意欲を燃やす「十三や」15代目。

手仕事にこだわる竹内さんの黄楊櫛作りの技術と心意気は、15代目の敬一さんにも、しっかり受け継がれている。

【工程の大きな流れ】

- ①材料の黄楊を板状に切り、煙で燻して灰汁を取ったあと、10年寝かせる。
- ②十分乾燥した黄楊に丸鋸で櫛の目を入れる。
- ③丸鋸で櫛に目が入ったら、金やすりのほか、鮫の皮、木賊(トクサ)を貼った「はずり棒」で丹念に磨き上げる。
- ④歯が仕上がったら、持ち手側の縁を糸鋸で成型。
- ⑤鉋をかけて肩を丸めたあと、木賊で磨き込む。
- ⑥鹿の骨でつやを出す。
- ⑦椿油をつけて完成。



いぶして灰汁をとり、乾燥させた黄楊の木。



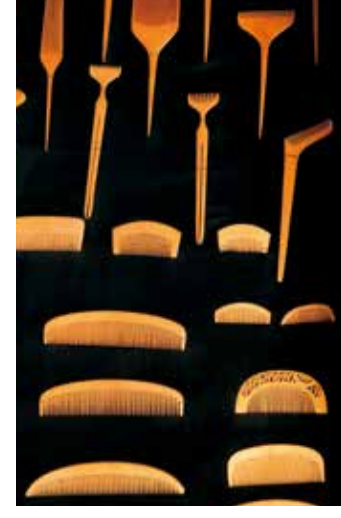
歯が仕上がると、続いて持ち手の側の加工に入る。糸鋸で成型し、鉋で肩を丸めた後、木賊で磨き込む。



櫛の形や目の厚さなど、すべてが手作業で進められる。「どうして機械を使わないかって? 結局、手に勝るものはないからね」と竹内さん。

黄楊とは

黄楊は暖地に自生するツゲ科の常緑小喬木で、古くから印鑑や将棋の駒、櫛などに用いられてきた。主な産地は東京御蔵島と九州南部。特に鹿児島県南薩地方、指宿周辺を産地とする薩摩黄楊を使った櫛は江戸時代、「櫛になりたや薩摩の櫛に 諸国娘の手に渡ろ」と歌われるほど、その名は知られていた。指宿周辺の黄楊は年輪の幅が狭く、そのため硬く、緻密さと粘りがあるため、細い歯でも折れにくい。この地方では、女兒が生まれると黄楊の木を植える習慣があり、婚礼の際にはその木を売って嫁入り道具を持たせたという。



黄楊由来は梅雨時に葉が黄色くなることから「梅雨黄(つゆき)」と呼ばれていたものが、しだいに「黄楊(つげ)」に変化していったという説がある。

びんかき櫛、日本髪用けずり櫛、梳き櫛など、「十三や」累代の職人が残した黄楊櫛の数々。

世の中に出ている「本つげ」。あれは紛い物なんだ。

したら、まず何うのがロングかショートか。パーマをかけているかどうか。あと年齢によって髪の色が違うので、若い人の場合は目が粗い櫛を、逆に年齢が高くなれば髪が細くなるので細かい目というふうに、うちではまず使う方のことをきちんと伺ってから、購入してもらおうにしています」

同店で使用するのももちろん国産黄楊だけ。ただし購入する側の予算を考慮して、「説明はしても、こちらから商品を勧めることはない」のだから。

◇

ところで、一風変わった「十三や」という屋号、命名した初代は元仙台藩士だったそうで、

「結局、下級武士で食えないから逐電して江戸に逃げてきたんですね。当時、このあたりには櫛屋職人が多かったので修業して店を開くことになったんですが、ならば旧藩にばれないような屋号を考えたって、験が悪い九と四(苦と死)

を足しちまえ、と。平仮名で「や」としたのは職人の店というプライドがあったからだと思えますね」

創業以来、十三やでは1本の櫛が完成する60を超える工程を、すべて1人の職人が手作業で行なってきたが、それは今も変わらない。「どうして工程が60もあるのかって? そんなことはわかりません。昔からそうだから、としか言いようがない(笑)」

黄楊櫛には静電気を抑え、髪や地肌に優しく、使えば使うほどに髪になじんでほしいにその人だけが持つ髪の癖を理解していく、という特徴がある。そんな性質を持つ木だからこそ、手仕事に勝るものはないのかもしれない。

竹内さんは中学を卒業後、15歳でこの世界に入り55年、黄楊櫛を作り続けてきた。

「師匠は醍醐善次郎という神田末広町生まれのおじいさん。当時で言えば、ま、名人ですね。ところが、そのおじいさん、とにかくにも言わない。ただ黙々と作って

いるだけ。で、私はそれをじっと見ながら覚えて、作ったものを見せると「ダメだ」と突っ返される。ほんと、その繰り返し。教えてもらったというより、自然と身体が覚えてきたという感じですね」

入門後10年は材料の見方や削り方など、一通りの基礎を叩き込まれた。

「それから2年は御礼奉公。その間は当然身銭が入ってきません。ま、一生使える技術を身につけてもらったんだから、安い授業料なんですけどね」

さらに客の注文通りに黄楊櫛を作れるようになるのは7、8年の歳月が必要になるといふ。

「私の場合は、18年くらい経った頃だったですね、おじいさんから「ここ、どうやったらいい?」って聞かれたことがあって。エッ、こんな人でも迷うことがあるのか、と。そのときつくづく黄楊櫛っていうのは奥が深いもんだなあ、と思いました」

◇

そんな竹内さんの後継者が、高校卒業後、19歳で職人を志すことになった長男・敬一さんだ。

「小さい頃から父の仕事を見てきたので仕事の流れはわかっていたんですが、最初は作っても作ってもダメだしされてばかりで……初めて1本作っていいぞ!」と言われたのが7年ほど経ってから。実は、その櫛をお客さんが買っていかれてしまてね、後日「こないだ買った櫛とても良かったわ」と……。で、この仕事から抜けられなくなった、というわけです(笑)」

父親に師事し今年で25年。職人としての風格も堂々の敬一さんが、胸に刻んでいるのが「恥ずかしくないような仕事をしろ!」という父の言葉だ。職人が職人として生きるために、一番大切なこと——。それが、この短い言葉にすべてが集約されているように思えた。竹内さんは言う。

「職人の技術っていうのは、文献なんか残っていないから、親方から身体で引き継がれてきたもの。だから、インキキしたり、一度途絶えたものはもう二度と元には戻らない。つまりなんだかんだ言っても、結局はここ(心)の問題ということですよ」

瞳の奥に、職人の覚悟が見えた。